

都道府県別賞一等

お守り

栃木県 宇都宮市立古里中学校 一学年

原口 眞帆

私は、小学校五年生の十一月から六年生の八月までの約九カ月、大きな病気が見つかり入院し、手術、治療をしていました。この入院は突然の事でしたので、私たち家族の生活は、あの日から一転し、変わってしまいました。

正社員としてフルタイム勤務していた母は私の入院に付き添うために、仕事を四カ月休みました。その後も私の治療に合わせて、一緒に個室で付き添い入院をするため、仕事を休むことになりました。その期間は、毎月一週間から二週間ほどです。コロナ禍でもあったため一度病室に入ると、病院の外に出られなくなりません。母は職場の方々に協力してもらい、仕事に行けるときだけ出勤するようになりました。フルタイムではなく、パートタイムでの勤務です。当然、収入は減ります。収入が減るのに、付き添い入院のためにかかる出費があります。付き添い者には食事は出ません。毎食、病院内のコンビニで購入していました。個室は差額ベッド代、母の使用する寝具のレンタル代が必要です。そして、その他にも、洗濯の為に洗濯カードや洗剤代などの費用もかかります。元気に過ごしていたら必要の無かった、想定外の出費がある中、私には生まれた時に入った医療保険がありました。何かあった時のために「お守り」として入っていた保険だと母から聞きました。入院や手術での保障があります。その保障が助けになりました。

「ただそばに居ることしかできなかった。」

入院を振り返ってこのように母は言っていました。私にとっては、母が仕事を休んで、辛い治療の中、一緒に居てくれたことはとても大きな支えでした。医師や看護師、病棟保育士、薬剤師、院内学級の先生たち。たくさんの方にお世話になった入院生活でしたが、家族がそばに居てくれることが、何よりも一番嬉しいことです。コロナ禍で、面会や付き添いは両親どちらか一人、交代は出来ないという厳しい決まりがありました。母以外の家族には会えないのです。そんな中、母も仕事で来られない、なんてことになっていたら、私は治療を頑張れなかったと思います。保険による保障は助けになりました。

いつ、誰が、どんな病気になるかなんて分かりません。でも、家族の誰かが病気になってしまった時、当たり前だった生活が一転してしまうことがあります。備えがあれば、一つ、心配事を無くすことが出来ると思います。保険は「お守り」であることを経験しました。

## 第61回中学生作文コンクール

病気になりたくてなる人はいません。病気になるかもしれない、なんて考えながら生活をしているわけではありません。また、子供には医療保険はいらない、と考える人もいるかもしれませんが。保険は使われないに越したことはないと思います。しかし、もしもの時に備えた「お守り」が私自身だけではなく、家族の生活の助けになりました。

今まで、保険の事をあまり考えることはありませんでした。しかし、今回の入院を通して身近に感じるようになりました。これから安心して日常を送るために、もっと保険について理解したいと思いました。